



0歳児クラス | とうきょうすくわくプログラム 実施レポート(全3回)

— 日々の関わりの中で芽生える「感じる・試す」体験 —

しおどめ保育園江戸川中央では、乳幼児期の「感じる・試す・関わる」体験を大切にしながら、日々の保育の延長として「とうきょうすくわくプログラム」に取り組んでいます。本レポートでは、0歳児クラスで全3回にわたり実施した活動の様子をご紹介します。

活動のテーマ

からだ遊び(0歳児)

テーマの設定理由

保育室の中で机の下にくぐり込もうとする姿や、段差に手をつけてよじ登ろうとする姿が多く見られるようになる。また、つかまり立ちから一歩踏み出してみようとした児が、体を揺らしながらバランスを取って進もうとするなど、子ども達は自分の体を使いながら「どう動いたら進めるのか」「もっと行けるかな」と試しながら遊んでいる様子があった。

また、柔らかいマット上や床の素材が変わる場所では、立ち止まって足元を確かめたり、少し不安定な場所でも進もうとしたりする姿があり、自分の体の感覚や動き方に気づき始めていることが分かった。そこで、子どもの「どうやって進むんだろう」「もっとやってみたい」という思いを受け止め、さまざまな素材や傾斜を用意することで、子どもが体の使い方やバランスの取り方を自然と学べるような活動を設定した。

活動スケジュール(全3回)

第1回 5月

体の感覚を知り、体幹の土台を作る。

第2回 8月

くぐる、登るなどの基本の動きを広げ、自分の力で進む経験を増やす。

第3回 10月

バランス遊び・傾斜に挑戦する。

第1回

体の感覚を知り、体幹の土台を作る。

初回となる第1回では、身近な素材に触れる体験を通して、子どもたちが「感じる」「確かめる」といった感覚を、自分なりのペースで重ねていく時間を大切にしました。

活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・プレイマット ・センサリーマット ・トンネル

探究活動の実践

2025年5月12日、子ども達がいはいや、つかまり立ちの中で、段差に手を掛けたり、机の下にくぐろうとする姿が多く見られたことから、子どもの「どうやって進むんだろう?」「ここは通れるかな?」という思いを受け止められるよう、さまざまな体の動きを試せる環境を準備した。足裏の感覚を楽しめるようセンサリーマットを床に敷いたり、トンネルを設置したりして、くぐる・出る・触れるといった意欲を引き出せるようにした。

活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり

・センサリーマットでは、足裏や手のひらで感じる感触の違いに気がついている様子であった。「ん?」と表情を変えながら保育者を振り返る姿が見られた。凹凸部分を手でなぞり、はいはいで何度も往復しながら素材の違いを楽しむ姿もあった。

・トンネルくぐりでは、友だちの姿が見えると「ばあ」とのぞき合ったり手を伸ばしたり、くぐりながら笑い合うなど、体の動きを通じたやりとりが自然に広がっていった。保育者が「ここを通れるかな?」と声を掛けると、自分で高さ確かめながら慎重に体を前へ進める姿も見られ、挑戦する姿が増えていった。



振り返りによって得た先生の気づき

・はいはいやつかまり立ちで段差などに手を伸ばす姿やトンネルを覗く姿から、子ども自身が「どう登るのか」「どう進むのか」を試したい意欲を持っていることが分かった。また、センサリーマットやトンネルといった環境により、手の平、足の裏で感じた感触の違いに気が付いたり、友だちの存在を意識しながら動きを楽しんだりする様子から、体の感覚を通して探索する経験が意欲に繋がっていることを感じた。この意欲を引き出すために、柔らかさや凹凸の違うマット、くぐる・登るなどの多方向の動きができるような環境を整えることが重要であると考える。



・からだ遊びを重ねる中でははいはいの動きが安定し、段差や傾斜に対して自分で体の位置や力の入れ方を調整しようとする姿が増えてきている。次回の活動では、登る・傾くといった多方向の動きが自然に発生するような環境を発展させていきたい。

・友だちの動きを真似て後をついて行くなどの姿も見られ、からだ遊びでの挑戦が、友達への興味や関りにも繋がっていることに気が付いた。一方で、人が集まりやすい場所では動きづらさもあるため、通路の幅を広げたり、コースの位置を変えたりすることで、子ども一人ひとりの興味や発達段階に合わせた調整が必要であると感じた。